

第一章

恵子叔母は母の一番下の妹で、叔母といっても三十歳。僕とは十三歳違いだ。

実は、僕と叔母とは血はつながっていない。父と母は再婚同士で、僕は父の連子だった。

恵子叔母は三年前に離婚し、それまで住んでいたアパートを出て、僕の家近くに引っ越してきた。

そんなある日、両親が海外転勤になった。そこそこの難関大学を目指していた僕は、私立の高校に通っていたし、予備校もあるので、両親についていくことができなかった。

「私たちのいない間、純次の面倒をみてる？」

母に頼まれ、叔母が僕の家で僕の面倒を見てくれることになったのだ。

前の旦那からもらった慰謝料が結構あるらしいが、叔母は、平日はスーパーでパートに出

たり、家にいるときは部屋の片付けをしたり、質素な生活を送っていた。

叔母は色白で、胸とお尻が大きい量感のある身体をしている。このグラマーな叔母とふたりっきりなのだから、思春期真っ盛りの僕がこの叔母を性の対象と見るのは自然なことであつただろう。

僕は、こっそり叔母の下着をつかってオナニーをするようになった。

ある日、学校から家に帰ると、僕は浴室においてある叔母の洗濯籠の中をさぐった。

後で叔母に気がつかれない様に注意深く中を捜すと、叔母の着替えた下着類が入っていた。

ショーツ、ブラジャー、ガードル、レオタード、などをその場にひろげた。

ショーツはひどく汚れた物もあり、クロッチの部分にべっとりと黄ばんだおりものが付着しており、まだ半乾きで匂うとちょっと生臭い様な叔母の匂いがした。

とりあえず僕はこのぬめりを自分のペニスにまぶす様にショーツを巻きつけ、別のショーツのクロッチに付着した分泌物の匂いを嗅ぎながら一発抜くことにした。

程なく興奮の頂点に達して「おばさん……」と叔母の名を呼びながらショーツの中に、射精しようとした。

まさにそのとき、人の気配を感じて振り向くと、なんと浴室の入り口に叔母が立っていた。

いつの間にかパートから帰ってきていたのだ。

僕の心臓は氷ついた。

叔母は固まってしまっている僕のそばに静かにやってきて、僕の足元に座った。

叔母は珍しくスカートを履いていた。長い足が見えていた。

そして、いつも体のラインが出ない服を着ているのに、今は胸の大きさが良くわかる服を着ていた。

「純ちゃん、いつも私の下着で自分で慰めていたのね？」

僕は自分の顔が赤くなるのがわかった。

叔母は私の頬に手を添え、笑いながら「すぐにいい人が見つかるわよ」と言った。

いつもと違う叔母に僕は心臓がドキドキして、チンポが頭を持ち上げた。

「ねえ.....私にさせて.....」

「えっ？」

「まだ.....途中なんでしょ？ 私に手伝わせて.....」

叔母はそう言うと、僕の返事も聞かず、僕を脱衣室の床に仰向けに寝かせた。

「ちょっと待って」

叔母は上着を脱いだ。ブラジャーから大きな乳房がはみ出さんばかりであった。

「わわわ.....」

驚いている僕を、叔母が抱きしめ、僕の顔を自分の胸にうずめた。ブラジャーで盛り上がった胸が気持ちよかった。

「どう？　これが女の胸よ.....柔らかいでしょ？」

「う、うん.....」

叔母は手で僕の頭をなで回した。叔母は私の髪をなでながら息を荒くした。

「ねえ、手でしてあげる.....」

「え.....でも.....」

「恥ずかしがらないで.....」

僕は頭を混乱させながらも、これから起こるであろう未知の淫らな行為に胸を時めかせた。

僕は仰向けになった。

叔母は少し躊躇していたようだったが、「どうやったら気持ちいいの？　少しだけ教えて...」と恥ずかしそうに言った。

僕はペニスを握って、「こうやって.....擦ればいいよ.....」と上下に扱きながら説明した。

「なんか.....すごくえっち」

叔母は顔を赤くして言った。叔母は横に置いてあったティッシュの箱を手を取った。

「じゃあ.....これで.....受け止めてあげる.....」

そう言って、叔母は僕のチンポを握り、上下に扱き始めた。

「これでいい？」

手の動きはぎこちないが、気持ちよかった。自分でするよりずっといい。

「うん.....気持ちいい.....そのまま続けて.....」

叔母は黙って僕のペニスを扱き続けた。

興奮していた僕は、しばらくすると、出そうになった。

「ああっ！ 出そう！ もう出る！」

僕の声聞き、叔母は慌ててティッシュでペニスの先を押えた。

「うん.....いいよ.....」

「出るよ！ あああっ！ 出る！ あああああっ！」

僕はたまたまチンポを痙攣させながら叔母の手の中で精液を放出した。

「あっ！ すごい！ 温かい！」

叔母が歓喜の声をあげた。

気持ち良かった。

陰囊の中の精液が全部出た感じた。

叔母は驚いたようだったが、上手く受け止めてくれた。

しばらくして、チンポの先から精液の残りが零れ落ち、股間から独特の男の匂いが立ち込めた。

「すごい.....わあ.....」

叔母は新しいティッシュでチンポをきれいに拭いてくれた。

目を閉じて余韻を楽しんでいた僕に、叔母がパンツを捌かそうとした。

「いいよ.....自分ではくから.....」

「そう.....？」

叔母は少し戸惑っていたが、下半身裸の僕を残して、たっぷりと僕の精液を含んだティッシュを持って脱衣室から出ていった。

それからしばらくは気まずい雰囲気だった。僕は叔母が持っていた、処理した後のティッシュのことが気になったが、叔母に訊ねることができなかった。

その後叔母は出かけた。

六時頃帰ってきて、夕食の準備を始めた。

「ご飯出来たわよ」

叔母がいつもと同じように僕の部屋の外から声をかけてきた。

僕はのそのそとキッチンへ行って、夕食を取った。

叔母は無言だった。でも、気まずい雰囲気でもなかった。

スパゲティーを食べている間、叔母はずっと僕に背を向けて洗い物をしていた。僕はそそくさと食事を済ませると自分の部屋に戻った。

(やっぱり気まずいなあ.....)

僕はオナニーのとき、もっと慎重になればよかったと後悔した。

しかし、叔母のほうから歩み寄ってくれて、この重苦しい空気を打ち破ってくれた。

「入るわよ.....」

しばらくするとドアの向こうから叔母の声がした。

「えっ？ う、うん.....」

僕が返事をするとう叔母が入ってきた。普段通りの服装で、地味なブラウスにグレーのスカートだったが、先ほどは穿いていなかった黒いストッキングを身に付けていた。

叔母は僕のベッドに腰掛けると口を開いた。

「ねえ.....また私の下着の臭いを嗅きたい？」

「えっ.....いや.....」

僕は顔を上げる事が出来なかった。

「でも、あんたも来年受験だし、あまりそういう事に夢中になってもいけないけど、男の子は性欲も抑えるとおかしくなっちゃうから.....」

僕は顔を上げて叔母を見ました。

「だから.....家にいる時はなるべく私が相手してあげるわ」

「えっ？」

僕は叔母の言っていることがよく理解できなかった。

「さっきみたいにしてくれる.....。下着も今まで通り使っていいわ.....」

「え.....でも.....」

「他にもして欲しい事があつたら言って。ナイショはダメ。セックス以外の事なら聞いてあげるわ

.....」

「セックスはダメなの？」

僕は咄嗟に聞き返してしまった。

「当たり前でしょ！」

叔母が笑いながらも、顔を赤らめて言った。

「でも、あんたに彼女が出来るまでよ。性教育のつもりで相手してあげるんだから.....」叔母がうつむきながら言った。

信じられない展開だった。叔母はよほどの決心をしていたようだった。

何でもかまわない.....。

僕は夢見心地だった。

「それで.....あんたはどうしたいの.....？」

叔母の声で我に返りました。

「私、下着だって色やデザインが地味なのしかないし.....あんたが期待するようなのは買わなきゃ無いわ.....。とりあえず、ストッキングは穿いたけど.....」

僕のためにそんなことまでしてくれて.....。

そう思うととてもうれしかったが、いざとなるとどうしていいかわからなかった。心臓が破裂しそうなくらい脈動していた。

「じゃ、じゃあ.....」

僕は床に座って、腰掛けている叔母のスカートの中を覗きこんだ。すると、叔母は両手で顔を覆い、少しづつ足を開いてくれた。

「めくってもいい？」

叔母は顔を覆ったまま、「好きにきなさい……」と消え入るような声で答えた。

スカートのすそを足の付け根位までめくると、ストッキングのゴムがくいこんだ白い太ももとベージュのパンティが見えた。ちょっと陰毛がはみだしていた。僕はそっとその陰毛を抜いた。

「痛っ！」

「おばさんの毛だ……」

僕が言うと、叔母は顔を真っ赤にして「いやらしいわね、このコは！」とスカートを元に戻してしまった。

「ねえ、見せてくれるんでしょ？ 叔母さん……」

かすれた声で僕が言うと、叔母はため息をつき立ち上がった。ブラウスのボタンを外し始めたが、手が震えてなかなか外せないようだった。叔母も緊張しているようだった。

「ホントにこんなオバさんの体が見たいの……？」

念を押すように叔母が力なく聞いた。

僕は頷いた。

「まだおばさんじゃないよ」

「あなたから見ればおばさんよ……ああ、恥ずかしい……」

叔母は呟きました。ブラウスを脱ぎ、スカートをおろすと、叔母は下着姿になった。ベージュのブラジャーとパンティー、それに太ももまでの黒いストッキング。魅力的な体だった。

「お願いだから、今はここまでにして」

叔母はとても恥ずかしそうだった。

「うん……」

そうやって視線を股間に落とした。チンコが勃起して、ズボンの前が大きく膨らんでいた。

叔母も僕につられて視線を僕の股間に落とした。

「さっきあんなに出したばかりなのに……もう大きくなってるの？」

叔母にストレートに聞かれ、僕は顔を赤らめた。

「オナニーの手伝いして欲しいの？」

叔母は恥ずかしそうに言ったが、目は輝いていた。

「さっきみたいにしたい？」

叔母の言葉に僕が黙って頷くと、叔母は僕をベッドに寝かせ、僕のちんこを握り擦り始めた。

「あああっ！」

股間から得も言えぬ快感が駆け上がってきた。

すると、叔母はスカートをめくって僕の頭を跨いだ。

「おおっ！」

叔母のピンクのパンティが目の前に曝け出された。

股間のあそこの部分がしっとり濡れているのがはっきりと見えた。

「叔母さん.....濡れてる」

「いや.....恥ずかしいわ.....」

叔母のあそこの布の向こうにある！

そう思うと、たまらなく興奮してしまって自分を抑えることができなかった。

僕は思わず叔母のパンティにしゃぶりついた。

「あああっ！ だめよ！」

「おいしいよお！ 叔母さんのパンティ！」

「いやだわ.....恥ずかしいわ.....」

叔母が体をよじった。

叔母のパンティにしゃぶりついて興奮していた僕は、すぐに絶頂がきた。

「出る！ もう出ちゃう！ あああっ！」

僕が大きく叫んだ瞬間、叔母がベッド脇のティッシュを抜いて僕のちんこをくるんだ。叔母の手中でちんこがドクドク痙攣した。

「あんたも立派に男になったんだね.....」

ぽつりと叔母が言った。

その後、叔母といくつか約束をした。

叔母からは勉強はちゃんとするように言われた。

叔母も、これから先、自分がする事にまだためらいがある、と言う感じだった。

これが叔母との新しい生活の始まりだった。

(体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしく願いいたします。)